【論文】

大分市の戦災復興に関する調査研究　その３
-復興大分市と上田市長に対する評価について-

A Study on the Post-war Reconstruction of Oita city

日髙 圭一郎*1
Keiichiro HITAKA

Abstract : This paper has mentioned about the evaluation of Oita city after the post-war reconstruction and UEDA Tamotsu, a mayor of Oita city who led its reconstruction.
The evaluators are Ministry of Construction; HINO Ashihei, NANJO Norio and HAYASHI Fusao, novelists; OYA Soichi, a critic; UMESAO Tadao, a folklorist; and ISHIKAWA Hideaki, an urban planner.
It was understood from this study that original idea of Mayor UEDA is highly evaluated.

Keywords : ***Post-war Reconstruction, City Planning, Oita city***
戦災復興, 都市計画, 大分市

1. はじめに

著者は、昨年度の本誌において、これまでに収集整理できた文献情報等に基づき、大分市の戦災復興の全体像を示すことができた[1)]。

本稿では、戦災復興後の大分市（以下、復興大分市という。）と復興を主導した上田保大分市長（以下、上田という。）が、当時、「第三者」によりどのように評価されていたかについて、これまでに収集できた文献情報等に基づき、考察を行っている。

ここでいう「第三者」とは、大分県庁や大分市役所以外の機関と、当時の大分県や大分市に直接的な関わりがなく、全国的に知名度のある人物とした。

2. 建設大臣による評価

(1) 国土建設週間（1950 年）における戦災復興に関する建設大臣表彰[2)]

大分市は、1950 年の国土建設週間[注1)]に、全国の戦災復興都市の中より、優秀な都市として建設大臣の表彰を受けている。表彰文は次のとおりである。

表彰状

大分県　大分市

右は戦災復興事業に従事し卒先（ママ）あらゆる困難を克服して公共の福祉の増進を計りもって国土の再建に寄与された業績はまことに大であると認めここに本状を呈しその功績を表彰する

昭和二十五年七月十日
建設大臣　増田甲子七

大分市報[3)]には、大分市の公園施設の独自性の高さが評価されたとの記述もあるが、表彰する側、つまり建設省側の史料である「戦災復興誌　第弐巻　清算編」[4)]には、大分市は「戦災復興事業の推進にあたっては、財政多端と多くの困難を克服して、市民を挙げて本事業を急速に完遂した。」と記載されている。戦災復興事業の速度が評価されたように推察される。

(2) 国土建設週間（1950 年）における公営住宅に関する建設大臣表彰[2)]

大分市は、1950 年の国土建設週間に、国庫補助による市営住宅の計画等が評価され、建設大臣により表彰を受けている。表彰文は次のとおりである。

*1　建築都市工学部建築学科

表彰状

大分県大分市

大分市に於実施の昭和二十四年度国庫補助木造住宅の今津留団地は一団地住宅としての計画並に施工について最も優秀な成績を修め住宅建設事業の模範となるものである。

昭和廿五年八月一日

建設大臣　増田甲子七

この表彰については、一団地住宅の計画及び施工が評価されたことはわかるが、具体的に何が評価されたかがわからない。表彰状以外に関係する史料が確認できておらず、その詳細については不明である。

(3) 国土建設週間(1951 年)における公営住宅に関する建設大臣表彰[2)]

大分市は、1951 年の国土建設週間に、国庫補助による市営住宅の計画等が評価され、建設大臣により表彰を受けている。表彰文は次のとおりである。

表彰状

大分市

大分市において実施の昭和廿五年度国庫補助木造住宅の今津留南団地は一団地住宅としての計画並に施行(ママ)について極めて優秀な成績を収め住宅建設事業の模範となるものである。

昭和廿六年七月十日

建設大臣　野田卯一

この表彰についても同様で、一団地住宅の計画及び施工が評価されたことはわかるが、具体的に何が評価されたかがわからない。表彰状以外に関係する史料が確認できておらず、その詳細については不明である。

(4) まとめ

復興大分市は、建設大臣から一定の評価を得ていたことがわかった。特に「戦災復興に関する建設大臣表彰」では急速に戦災復興事業が遂行されたことが評価されたようである。

3. 文化人による評価

ここでは、復興大分市や上田を、当時の小説家、評論家、学者等の文化人がどのように評価していたかについて概観する。

(1) 火野葦平「ただいま零匹」[5)]

火野葦平[注 2)](以下、火野という。)の「ただいま零匹」は、高崎山自然動物園を発案した上田を、主人公のモデルとした小説である。1955 年 11 月から朝日新聞(夕刊)に連載された小説で、154 回で完結している[6)]。1956 年には単行本化されている。1957 年には佐野修二主演で映画化されている。

害獣だった野猿を餌付けし、自然動物園として観光資源化を図り、アイデア市長と言われた上田に、火野は関心を持ち、主人公のモデルとしている。

また、この小説では復興大分市の各所が舞台として描かれている。物語冒頭の象徴的な場面では「遊歩公園」を舞台とし、次のように描かれている。

【遊歩公園が描かれた部分】

歩き出そうとする国子の袖をつかんで、千絵はぐんぐん遊歩公園のなかに、入って行った。滝廉太郎の銅像の前にあるベンチに、自分が先に腰かけ、国子もそこに坐らせた。

＜省略＞

若々しい青年滝廉太郎の腰かけた姿に、もう冬を思わせるうすら陽がさしている。台座の名の地には五線譜が彫られ、その下に、

人生は短し

芸術が長し

と二行に刻んである。彫刻は朝倉文夫、どちらも大分県の郷土出身の芸術家であった。遊歩公園は大手通の強制疎開跡を公園化したものであって、道路幅三〇メートルに中央部一〇メートルに、花壇、フジだな、バラだな、泉水、散歩道、そして、朝倉文夫の二つの彫刻がかざられてあるのだった。銅像前のベンチから、大手通のつきあたりに、旧大分城址の石垣と、城内にある県庁の建物とが望まれた。

また、「ジャングル公園」や「墓地公園」も舞台として、次のように描かれている。

【ジャングル公園が描かれた部分】

尾高銀十は、「ジャングル公園」のなかに入りこんでいた。無意識ではあったが、にげこんだという方が適切かも知れない。なにかに追っかけられているような強迫観念から、自然に、隠れ場所をもとめたともいえる。

＜省略＞

尾高は、持ちまえのふてぶてしい表情をとりかえして、ジャングル内の小径をさまよった。

(この公園も、市長の仕事じゃ)

千坪ほどの区域に、あらゆる種類の樹木が植えられてある。一種一木、約六百三十種類の木があって、それには、いちいち、説明札が立ててあった、その一つを読んだ。

＜省略＞

六百数十種の木々には、六百数十本の説明札が立ててあり、どれにも詳細な解説文がつけてあった。(生きている植物図鑑というところだな。これらの文章も、みんな、園部市長が一人で書いたということじゃが、……)

公園の中ほどに、小庭園がつくられ、そこにはフジ棚や、泉水、ベンチなどがあった。そのベンチに身体をくっつけて腰かけた、高校生らしい、若い男女が手をとりあい、なにか、

甘たるい口調で、語りあっていた。

【墓地公園が描かれた部分】

市の南台地にあたっている墓地公園から、大分市はひと眼だった。別府湾や、国東半島はもちろん、そびえたつ鶴見岳、由布岳、さらに、遠く、九重山のいただきも望まれた。高崎山が、ぽっかりと、山高帽のようにすわっている。

墓参を終わった園部弓子と、小山田国子とは、このひろびろとした展望をながめながら、しばらく、公園内を散策した。

火野は、これらの公園が復興大分市を特徴づける場所と捉え、物語の舞台としたものと推察できる。

(2) 南條範夫「からみ合い」[7),8)]

南條範夫[注3)](以下、南條という。)の「からみ合い」は、雑誌「宝石」の 1959 年 7 月から 12 月まで連載された長編推理小説である。1959 年に単行本化、1981 年に文庫本化されている。また、1962 年には岸恵子主演で映画化されている。この物語の中では、戦災復興後の大分市中心部の様子が次のように描かれている。

【大分市中心部が描かれた部分】

自分の狡知に満足して、微笑しながら、大分駅に降り立った。

戦災で、市の中心部を壊滅されたと聞いていたが見事に復興していた。

駅の舎屋もスマートだったし、駅前の街路も広くて清潔だった。そのかわり地方都市らしい特色は全く失われて、映画のセットのような感じである。

―なるほど地方復興都市のモデルだな。

南條自体は大分市にはなじみがなく、たまたま一度訪れた際の半日程度の取材に基づき執筆がなされたとされている[6)]。戦災復興により、近代化されていることは評価しつつも、標準化された街並みを批判的な視点で捉えている。

(3) 林房雄「日本拝見 西日本篇　大分市 未完成小型文化都市」[9),10)]

林房雄[注4)](以下、林という。)は、「日本拝見 西日本篇 大分市 未完成小型文化都市」の中で、復興大分市と上田を論評している。「日本拝見」は週刊朝日に連載された日本各地のルポルタージュ記事である。この「大分市 未完成小型文化都市」の初出は、週刊朝日 1955 年 1 月 16 日号である。1958 年に「日本拝見 西日本篇」として単行本化されている。

林は大分市の出身で、旧制大分中学を卒業するまで大分市中心部で育っている。林が知る明治期から大正期の大分市と、戦災復興後の大分市との比較に基づき論評がなされている。隣接している別府市は全国的に有名であるのに対して大分市の知名度の低さを伏線として示したうえで、復興後の大分市の変貌について、次のように論評している。

【大分市の変貌について論評した部分】

焼け太り

＜省略＞

海の色と山の姿は、三十年前と少しも変らず、なに一つ加らず、なに一つ減っていなかった。だが、大分の町の姿は変わっていた。昔のものはなに一つ残っていないと言いたいほどの変りかたであった。しかも、それはみじめな変りかたではない。昔の貧乏くささがなくなって、明るい、広々とした町に変わっていた。

この町から貧乏人がなくなったわけではなかろう。裏町を探せば、かたむいた屋根とくずれた壁の、風通しの悪い、悪臭にみちた古い町筋ものこっているかもしれない。だが、滞在の三日間に、私が歩きまわったかぎりの町筋は、その最も古くて狭いものでさえ、昔にくらべると、広く明るくなっていて、うらぶれて物悲しい古い城下町の臭いはなくなっていた。

日本には、戦災で焼けた町が八十以上ある。その中のいくつかの町は、焼けてかえって美しくなった。例えば横浜は昔の美しい面影を失ってしまったが、東京は日一日と美しくなりつつある。大分もまた、小さいながら、焼けたおかげで美しくなった町の一つにちがいない。焼け肥りのできる活力と底力を内にたくわえていた頼もしい町の一つらしい。

戦災復興により、大分市が近代化したことを何よりも評価していることがわかる。さらに、復興大分市について、次のように論評している。

【復興大分市について論評した部分】

小公園の町

と言っても、人口十万をちょっと越えたばかりの地方都市だ。公平な第三者の眼には、日本のどこにでもある三流都市にすぎまい。「どんな町でも、三十年たてば三倍くらいにはなるよ。大分だけの話じゃないさ」と言われたら、「僕の居たころの人口三万五千の大分は、これ以上発展しそうな町には見えなかった。それが、ともかくも大きくなり、復興ぶりも全国三優秀都市の一つとして、建設大臣から表彰されたのだから喜んでいるのだよ」と私は答えよう。

町の到るところに、公園ができている。遊歩公園、若草公園、若竹公園、小鳩公園、ジャングル公園、墓地公園。----全部合わせても、東京の上野公園の半分にもならぬ街角の箱庭みたいな小公園だが、それでも芝生があり、花壇があり、並木があり、噴水があり、池があり、遊歩公園には「荒城の月」の作曲者滝廉太郎の銅像があり、郷土出身の朝倉文夫の力作「みどりのかげ」が白いはだをかがやかせている。

公園はできたがまわりの家並みは立ちそろわず、道路の舗装も完全ではないから、芝生も並木も白いホコリでよごれている。しかし、子供のための遊び場というものが全然なく、子供は道路で馬のクソまみれになり、電車にひかれそこね、

他の庭にしのびこんではたたき出されいた私の少年時代を思い出すと、これらの小公園が光かがやいて見えて、おのずから微笑をさそうのだ。

ジャングル公園に集められた樹木は六百余種あり、一種類ごとに和歌や俳句を引用した、親切で文学的な解説がついている。この程度の植込みは、昔の富豪や大官の邸宅にはいくらもあった。だが、それが個人の独占物でなく、市民のため、子供のためのであることが私にはうれしい、「ジャングル公園」という大げさな名前も、実は子供たちがつけたものであり、樹木の保護と園内の清掃も小学生たちの手で行われていると聞いては、この小人のジャングルを笑うことはできない。

墓地公園は町の南側の海を見晴らす丘の上にある。場所は景勝の地だが、公園はまだ未完成だ。市内の寺の古い墓石の一部を、そのまま移してならべただけのものだから、名古屋の総合墓地の規模、横浜外人墓地の美観、東京多摩墓地の壮重さはない。ないのが当然で、墓地が墓地らしくなるにも、半世紀や一世紀の時間が必要だ。しかし、墓地をあえて公園と呼び、公園の設計を開始した上田大分市長の創意には敬意を表したい。墓地をいつまでもお化けと幽霊の住み家にしておく義務はない。墓地は市民の魂の最後の休息所だ。生きている市民が、ときどき祖先とともに、墓地の静寂と平和を楽しむことは、魂の健康のためになる。墓地公園の着想は非凡だ。

このように公園の充実をもって復興大分市を高く評価し、あわせて上田についても評価をしている。さらに、公園以外の施設についても、次のように論評している。

【公園以外の施設について論評した部分】

同じで意味で、この町の火葬場も珍しかった。まるで山の上のホテルのロビィのように明るい。壁には天女の壁画が舞っていた。待合室は喫茶店に似ていて、庭にはコスモスが咲いていた。昔は焼き場と墓場は町の子供たちの二大恐怖であったが、今は市民の「休息所」の一つとなっている。

その他に、託児所、養老院、市営アパート、モデル中学校、体育館、競技場、市民プール-----文化都市として必要なものはなんでも一通りでき上っているか、または建設中である。町の南北をつらぬくスピード・ウェイをつくるためのトンネル工事も目下進行中。

私は市長さんに言った。

「まるで中共の町を案内さているみたいですね。なにもかもできたてのホヤホヤのところが」

必ずしも皮肉ではなかった。この勢いで十年もたったら、見事な小型文化都市のモデルができ上がるかもしれない。

公園以外の施設の充実も評価している。それらを全体的に「小型文化都市」と称し、戦前の貧乏くさい田舎の城下町からの脱却を基本的には賛美している。

しかしながら、林が「必ずしも皮肉ではなかった。」と書きつつも「まるで中共の町」との印象を上田に伝えていることから、南條と同様に都市の近代化は肯定するものの、その標準化に若干の違和感を示しているようにも思われる。

(4) 大宅壮一「日本の人物鉱脈　日本のスペイン・大分県」[11)]

大宅壮一[注5)](以下、大宅という。)は、「日本の人物鉱脈 日本のスペイン・大分県」の中で、復興大分市と上田について論評している。「日本のスペイン・大分県」の初出は文芸春秋1958年4月号で、大宅の連載記事の一つである。1959年に「日本人物鉱脈」として単行本化されている。

【復興大分市と上田について論評した部分】

野猿を愛する名物市長

＜省略＞

戦災をうけた大分市は、八分通り復興をして、完成近い新しい駅の前には、フェニックをうえて、南国調を出している。

大分市を語るには、どうしても市長の上田保氏を逸するわけにはいかない。彼の市長生活はすでに三期を了えて近く四期目を迎えようとしているが、彼をおびやかすほどの有力な対立候補は出ないようである。

私はこれまで各地でいろんな市長にあったけれど、こんなにビジョンと実行力を豊富にもちあわせたのは珍しい。町中いたるところに小さな公園があって、墓地までが見事に公園化されている。その一つに“ジャングル公園”というのがある。小さな植物園のようなものだが、個々の植物の説明書は、市長自身が一年がかりで書いたという。これは植物学的知識に文学と生活を結びつけたもので、市長のヒューマニズムと子供にたいする愛情が滲み出ている。

有名になった高崎山の野猿も、市長が長い間かかっておびきよせ、馴らしたものである。今では京都の嵐山、大阪の箕面、愛知の犬山などでも、同じ方法で猿よせがおこなわれ、「日本野猿連盟」というものまでできているが、コロンブスの卵と同じで、初めに試みたものの手柄は認めなくてはならぬ。

＜省略＞

大分駅前の大通りは思いきって拡げられ、シャレた遊歩公園ができて、その中央に県の生んだ天才作曲家滝廉太郎の銅像が建っている。彼はここで結核で亡くなったのだが、病床で作曲したものは、彼の母がすべて焼いてしまったという。その中にはどんな名曲が入っていたかもしれないと惜しまれている。

大宅も上田の独創性を軸に、高崎山を含めた公園の充実を評価している。

(5) 梅棹忠夫「日本探検　高崎山」[12)]

梅棹忠夫[注6)](以下、梅棹という。)は、「日本探検　高崎山」の中で次のように上田を論評している。「高崎山」の

初出は中央公論 1960 年 8 月号であり[13]、梅棹の連載記事の一つである。1960 年に「日本探検」として単行本化されている。

【上田について論評した部分】

ナチュラリスト市長

上田市長は、もともと弁護士だという。動物学の専門家でもないこの人が、サルのエサづけという奇想天外なプランを考えついて、それを実現してしまったということは、やはりおどろくべきことと言わねばなるまい。このひとは、どうしてこんなことを考えついたのだろう。

わたしは、このひとがひじょうなアイディア・マンであるという評判は聞いている。わたしは、市長と一しょに大分市内をまわる。大分市。人口は約十二万。県庁があるというだけで、ほかになんということもない、地方の一小都市である。しかし、そこは市長の創意になるさまざまな施設があった。この人は、「公園市長」というあだ名がつくほど、公園づくりには熱心である。巨大なフェニックスの植えられた駅前広場、滝廉太郎の銅像のある遊歩公園、草花のさきみだれる若草公園、郊外の墓地公園、やたらに公園をつくった。どれもがうつくしく、気がきいている。なかでもおもしろいと思ったのは、ジャングル公園であった。面積は大したものではないが、一種一木、ここに七〇〇種以上の樹木をあつめ、町のまんなかにうっそうたる森林をつくっている。しかも、一本一本に、科学的にして文学的な解説がついている。これはみんな市長がじぶんでしらべたのだ、という。

わたしはすこしわかったような気がした。この人が、サルの自然公園という奇想天外なアイディアを考え、実行したのは、単なる思いつきのよさによるものではない。このひとは、もともとナチュラリストなのだ。ほんとうに自然を遇するみちを知っているひとなのだ。観光といえば、すぐにホテルを建て、遊戯場をつくることしか知らない人たちとは、人種がちがうのだ。この点は、高崎山の現状を理解するうえに、たいせつなことであるにちがいない。

梅棹も同様に上田の独創性を高く評価している。梅棹らしく、上田をナチュラリストと評している点が特徴的であり、興味深い。

(6) まとめ

当時の流行作家である火野と南條が、復興大分市を素材としたことは興味深い。火野にいたっては上田を主人公のモデルとし、復興大分市を舞台とした小説を全国紙に連載している。これらのことから、当時、上田や復興大分市は世間的に関心を持たれる存在であったものと推察される。大宅、梅棹の評論も文芸春秋や中央公論という大衆誌の連載記事であり、同様のことが言えよう。

南條と林については、戦災復興による都市の近代化は肯定しつつも、その標準化には若干の違和感を抱いている点が共通していることが興味深い。

また、南條を除き、ここでとりあげた文化人らは上田を高く評価している。共通して独創性の高い公園を整備したことを評価している。これらの公園自体は、上田が市長に就任する前から整備されることは決まっていた。その公園の付加価値、つまり、遊歩公園であれば滝廉太郎の銅像の設置や、ジャングル公園に全国の名木を集め、解説板を設置したことなどは上田の発案である。単なる公園として整備するのではなく、価値を付加することにより、市民にとって魅力的な施設としたことが、この文化人らの評価につながっている。

さらに、高崎山自然動物園に関わる上田の取り組みは当然のことながら評価されている。特に興味深いのは、梅棹が上田をナチュラリストと評価していることである。上田は、ジャングル公園、高崎山自然動物園、市長退任後には株式会社大分生態水族館を設立し、大分生態水族館（現・大分マリーンパレス水族館「うみたまご」）を建設している。上田は植物、動物等の自然への執着が強く、梅棹のナチュラリストという評価は言い得て妙である。

4. 都市計画家・石川栄耀による評価

ここでは、復興大分市や上田を、都市計画家・石川栄耀がどのように評価していたかについて概観する。

(1)「名都の表情　條件と分類」[14]

石川栄耀[注7]（以下、石川という。）は、「名都の表情　條件と分類」の中で、「名都の條件」を示したうえで、復興大分市と上田について論評している。

【名都の條件】

しからば「日本の名都」と称されるための條件は何であろうか。それを考えてみる。

そこで取り敢えず作為なく、漫然と「名都」と称され来つた一連の都市を大量観察し、その條件整理をするならば、次のように結果が出そうである。

第一に、そのどれもが美しい水をもつている。美しい海岸か、湖辺か、或いは流水が都市に接しており、それが家並の中に埋もれることなく、余裕ある緑で保護されている。

第二に、そうでない場合、これに代る美しい公園乃至緑道が市の中心にある。

第三に、市民の「登高、展望」し得る丘が市の周囲にあつて、その都市を抱いている。

第四に、美しい建築が造形的に集結しているか、水景に望むか、山腹にあつて、余韻を醸している。

第五に、歴史・教養・人心のどれかに関する市民感情が、ソコハカとなく市中を流れている。

これらの條件全部でないにせよ、少なくともその主要な條件が、名都と称されるものの中には満足されている。

【復興大分市について論評した部分】

（五）大分市

大分は明かに札幌系の都市である。

或いは、札幌よりも近代的だとも言える。

ここの駅前広場は広々として取つてあり、正面道路が三六米で張られている。これに沿うてアーケードのついた商店街が現出する。

正面道路の真中どころで、これに東西にまた広路が出来ている。この第二の広路に沿うて城があり、その中に県庁がくすぶつている。城の外部に、堀に沿つて市役所その他の官公衙が集結されている。

しかし、これまでは平凡である。平凡でないのは、この城から直北に（従って駅正面道路に平行に）緑道があることである。広路の中央が花壇であり、その中どころに級友朝倉文夫作の滝廉太郎像がある。その姿誠に柔かく、級友の愛が全身を包んでいる。

些か斜に構えて、椅子にかけた三十有歳の音楽家の姿はこのままに、今は若い子女をして恋わしめるに足る。何れにせよ「この彫刻を思いついた人」「これを彫った人」達の生涯の傑作でもあろう。大分はこの像あるが故に、その緑道あるが故に、我々にも懐かしき都市になる。

大分市長は、かなりな行動派と聞き及んだが、その行動の底には、滝廉太郎に通う詩があるものと見た。

彼の構想になる全国の名木を集めたジャングル公園（子供が勝手につけた名）、小品の如き公園墓地。それに彼が建設前に必ず色彩の調和をするという、その効果の美しいモデルスクール、火葬場など、宝石のように全市を飾つている。

時に市長の奇才は、高崎山公園という別府との間の海岸沿いの丘の山猿をなづけて、文化財としてしまつたことである。

和かい秋光の中に、人を人ともせず戯れている猿族は、見事な観光財である。猿の一匹は全群のリーダーであるという。彼はその威を示すべく、尾を軽く上にあげている。

また、その一匹は全群の安危を背負って、看視に当たっている。看視猿は一段高い石垣の上に、人間の投げる餌には眼もくれず、小賢しき眼を八方に配っている。

相撲をとる子猿。高い杉の木の天辺で呑気な展望をほしいままにしている猿。屋根の上をシタリ顔に歩き廻っている猿。猿々々。誠に輝かしき猿の世界である。

これあることの誠によいかな、である。

この郊外に、更に「荒城の月」の作曲の対象となった城郭があるはずであるが、行かなかった。しかし、別府の俗に対し、大分の知性は郊外の隅々まで活々と通っている。

「名都の條件」と復興大分市の論評を照らし合わせると、復興大分市については、主に第二、第五の条件に該当するように考えられる。

市の中心部に公園や緑道が整備されており、第二の条件を満たしている。

さらに、緑道には滝廉太郎の銅像が設置されている。一方、郊外には山猿を手名付け、文化財化を図った高崎山がある。独創的な公園の発案や公共施設の色彩指導を行う知性的な市長がいる。つまり、歴史・教養・人心に関する市民感情が市中を流れているという第五の条件を具現化しているのが、この銅像や高崎山、さらに市長であり、それらを高く評価している。

(2)「余談亭らくがき　都市美鑑賞　駅前及公館」[15]

石川は、「余談亭らくがき　都市美鑑賞　駅前及公館」の中では、次のような文脈において復興大分市の駅前を評価している（下線部）。

【駅前広場についての論評】

駅前及公館

どこの町でも駅を降りると駅前広場がある。これが猫のヒタイのようだと重苦しいし、ダダッ広いと心細い。丁度好い位な大きさで芝生に噴水などがあるのが望ましい。

玄関の前に水を打つた心意気である。

呉の駅前には調達庁が頑張って（ついでに増岡邸も）天の岩戸のように呉の第一印象の感じを暗くしており、福岡は名都なるにかかわらず、駅前は相変わらずゴミゴミしてる。

九州八幡には日本一の駅前の仕度が出来、広路、ビル、彫刻等、日本放れした風景だが、おしいかなカンジンの駅が出来てない。

内海ぞいの尾ノ道の駅前は広場があつて、スグ瀬戸内海になつており、そこに白い内海汽船が待つている。一寸ヨソにないハデな風景である。となりの福山は駅前が全面バス・ステーションになつて居るが、数社競争とあつて、ノベツ幕なしに客を呼んでいる。

山形県の米沢の広場には、誠に突飛な日本式の臥竜の松に石ドロウがある。

東京駅前はダダッ広くてしまりがなく、池袋は銀行がシヤリシヤリ出て発展を止めてしまつた。こうして見ると、マトモな駅前というものもないものである。<u>東海道の豊橋、大分県の大分がまア合格と云う可きなのであろうか。</u>

ここからは、石川が復興大分市の駅前広場の何を評価したかがわからず、今後、調査が必要と考えている。

(3)「余談亭らくがき　広場抄　彩都談義」[16]及び「余談亭らくがき　ヨーロッパの都市・日本の都市　日本の都市を楽しく」[17]

石川は、「余談亭らくがき　広場抄　彩都談義」の中では、次のような文脈において上田を評価している（下線部）。

【色彩に関する上田についての論評　その 1】

彩都談義

都市の美しさは屋根にある。

ニューヨークからロンドンに、ロンドンから北欧をまわつた人は誰しもそれを感ずるであろう。その点、日本の都市は美しい都市たる資格、零と云ってよい。

まつ黒な屋根がチツ序なく、波打ち重つているだけである。緑にも空にも調和のしようがない。

×

その点中国は段違いに華やかで、朝鮮はまた話にならないミジメである。

中国の屋根は五彩に瓦でジウタンのようである。とり分け、孔子廟や、宮城等の黄瓦が碧空に輝いてる美しさは絶対である。

(朝鮮を歩いていると枯草の丘だか都市だか解らないのにブツかる。)

×

然し日本でも近頃いくらか色に気をつけるようになった。

岡谷の市長は諏訪湖畔の建物の色の為めに色調査委員会をこしらえた。

NHK は赤屋根白壁、SBC は青瓦の高塔で湖畔公園と調和し、一寸日本放れして居る。大分の市長は公共建築をたてる為めに一応油絵を書いて見ると云う。

こう云う市長が出る事は、日本をドレ程好くするか解らない。

市長と色彩と云えば、北海道の稚内の市長は不燃化と暖房節約の為め、安いレンガをつくり大量に市販した。その結果町が明るくなり、美しくなり、市民に愛市心が出たそうである。

石川は、「余談亭らくがき　ヨーロッパの都市・日本の都市　日本の都市を楽しく」の中でも、次のような文脈において上田を評価している(下線部)。

【色彩に関する上田についての論評　その 2】

日本の都市を楽しく

日本人の顔は本当の笑いがないように、日本の町は笑っておりません。住宅地の塀は高く、道路や川にはものを捨てます。

<省略>

私はイギリス人の私の大先生に「君の国の都市はどうも陰気なようだな、都市というところは皆のクラブなのだから楽しくなくてはいけいない。それには、先ず広場をつくること。次に水辺を美しくする事だ。ヨーロッパの水辺は市民生活の中心だよ」と肩をたたかれました。広場はどうも少しあきらめの形ですが、方々の町を歩いている中に(日本の都市の八割はひどいものですが)水辺をもつたきれいな都市があるのを見つけました。不思議にも、それらの都市の評判はいいのです。釧路、盛岡、石ノ巻、新潟、尾ノ道、高梁、松江、萩、広島、福岡、高知。

むろん、水辺はそれらの都市の都心に近い所にあつて、その水際が少くも歩ける様になつていなくてはなりません。こうした場合、その都市の周辺一キロ位のところに美しい丘がとりまいていると、ここで、その都市が初めて“名都”となります。松江、盛岡、萩などというのはその代表でしょう。

ただし、この山と水と都市のバランスだけでは少し心細い。本当に世界に対し、少しでも出せるという様にするには、もう少し手入れが要ります。それには広場は止む得ないとして、第一に建物の色を美しくするのです。

白壁の赤屋根は、或クリーム色の壁に青瓦。そういうものを特に水際におくのです。又は市営住宅などが山手に出来る折には、是非その壁と屋根の色を美しくする。近頃ボツボツ方々でそういう事に気をつけてきた様で岡谷側の湖畔の建物の色彩の美しいのに感心しました。一寸スイスの感じです。

それから宮崎市の大淀川の川岸にも河畔公園ができましたが、それには日覆いの美しいのがチューリップの様にならべてありました。日本としては大出来です。

都市の色彩に気をつけているのに大分市があります。ここでは市で何か建てる時、市長が一応油絵を描いてみるそうです。

(4)まとめ

石川は自らが示した「名都の條件」のうち公園や緑道が市の中心部にあり、歴史・教養・人心に関する市民感情が、市中を流れていることから、復興大分市を高く評価している。くわえて、復興大分市の駅前についても評価している。

また、石川は、上田が公共建築の色彩指導を行っていることが兎も角気に入っている。上田が油絵を趣味としたことは伝記[18]から確認できるが、公共建築の色彩指導を行っていたことは、これまでの史料では確認できていない。

5. 総括

復興大分市と上田が、当時、「第三者」によりどのように評価されていたかについて、調査、考察を行った結果、以下の知見が得られた。

①復興大分市は、建設大臣から一定の評価を得ていた。急速に戦災復興事業が遂行されたことが評価されたようである。

②流行作家や評論家等が、復興大分市と上田について全国紙等に小説や評論を掲載していることから、当時、復興大分市や上田は世間的に関心を持たれる存在であった。

③南條と林については、戦災復興による都市の近代化を肯定しつつも、その標準化には若干の違和感を抱いており、手放しに評価していたわけではなかったようである。

④また、南條を除き、本稿でとりあげた文化人らは上田を高く評価している。特に共通して独創性の高い公園を整備したことを評価している。単なる公園を整備するのではなく、価値を付加することにより、市民にとって魅力的な施設とした上田を評価している。

⑤さらに、高崎山自然動物園に関わる上田の取り組みは当然のことながら評価されている。特に興味深いのは、梅棹が上田をナチュラリストと評価したことである。上田は、植物、動物等の自然への執着が強く、上田を評価するうえ

で重要な視点を示している。
⑥石川は自らの「名都の條件」のうち公園や緑道が市の中心部にあり、歴史・教養・人心に関する市民感情が、市中を流れていることから、復興大分市を高く評価している。

注釈

注 1)国土建設週間[21]：建設省が 1948 年 7 月 10 日に開庁したのを記念して、1949 年に制定された国土建設記念日に併せて、7 月 16 日までを国土建設週間とし、国土建設に関する功労者の表彰等が行われている。

注 2)火野　葦平(ひの　あしへい)[22]：昭和時代の小説家。明治 39 年 12 月 3 日生まれ。家業の港湾荷役業玉井組をつぐ。昭和 13 年日中戦争に従軍中、「糞尿譚」で芥川賞を受賞。「麦と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」の兵隊三部作で流行作家となる。戦後、「青春と泥濘」「花と竜」「革命前後」などを発表。35 年芸術院賞。昭和 36 年 1 月 24 日睡眠薬により自殺。53 歳。福岡県出身。早大中退。本名は玉井勝則。

注 3)南條　範夫(なんじょう　のりお)[22]：昭和後期-平成時代の小説家。明治 41 年 11 月 14 日生まれ。東京帝大経済学部を卒業し、満鉄調査部に勤務。戦後、国学院大学教授などをつとめ、金融論を講義。一方で歴史小説を手がけ、昭和 31 年「灯台鬼」で直木賞。34 年武家社会の非情さをえがいた「残酷物語」で残酷ものブームをおこす。57 年「細香日記」で吉川英治文学賞。東京都出身。本名は古賀英正。

注 4)林　房雄(はやし　ふさお)[22]：昭和時代の小説家。明治 36 年 5 月 30 日生まれ。東京帝大在学中に短編「林檎」を「文芸戦線」に発表し、プロレタリア作家として出発するが、のちに転向。昭和 8 年小林秀雄らと「文学界」を創刊。戦後は「息子の青春」などの中間小説をかき、「大東亜戦争肯定論」で話題をよんだ。昭和 50 年 10 月 9 日死去。72 歳。大分県出身。東京帝大中退。本名は後藤寿夫。作品に「青年」など。

注 5)大宅　壮一(おおや　そういち)[22]：昭和時代の評論家。明治 33 年 9 月 13 日生まれ。賀川豊彦らの影響をうけ、日本フェビアン協会創立に参加。大正 15 年文芸評論家としてデビュー。昭和 8 年「人物評論」を創刊した。30 年「無思想人宣言」を発表。社会評論家として戦後のマスコミ界で活躍、「一億総白痴化」「駅弁大学」などの流行語をつくった。「炎は流れる」で 40 年菊池寛賞。昭和 45 年 11 月 22 日死去。70 歳。大阪出身。東京帝大中退。

注 6)梅棹　忠夫(うめさお　ただお)[22]：昭和後期-平成時代の民族学者。大正 9 年 6 月 13 日生まれ。はじめ動物学を専攻、今西錦司ひきいる京大旅行部で海外学術探検をおこなう。昭和 30 年京大カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊に参加。32 年「文明の生態史観序説」を発表し反響をよぶ。大阪市立大学助教授、京大人文科学研究所教授等を歴任。国立民族学博物館の設立に尽力、49 年初代館長、平成 6 年文化勲章。京都出身。京都大学卒。著作はほかに「モゴール族探検記」「知的生産の技術」など。

注 7)石川　栄耀(いしかわ　ひであき)[22]：大正-昭和時代の都市工学者。明治 26 年 9 月 7 日生まれ。大正 9 年内務省にはいり、名古屋市の都市計画にたずさわる。昭和 18 年東京都技師となり、戦後の首都圏開発をつくす。23 年建設局長。のち早大教授。日本都市計画学会会長。昭和 30 年 9 月 25 日死去。62 歳。山形県出身。東京帝大卒。著作に「都市計画および国土計画」など。

参考文献

1)日髙圭一郎, 大分市の戦災復興に関する調査研究 その 2 -大分市の戦災復興の全体像について-, 九州産業大学建築都市工学部研究報告 第 3 号 2020, pp. 1-6, 2021 年 3 月 31 日.

2)大分市役所市長室, 市政のあゆみ, 大分市役所, 1955 年 3 月 20 日.

3)大分市役所, 大分市復興に建設大臣表彰　市長帰任談, 大分市報(第 62 号), 1950 年 7 月 21 日.

4)建設省編, 第 1 章 総論, 戦災復興誌 第弐巻 清算編, 財団法人都市計画協会, 1963 年 3 月 20 日.

5)火野葦平, ただいま零匹, 新潮社, 1956 年 7 月 30 日.

6)松本義一, 名作の舞台を行く 大分文学紀行, 大分文庫⑭, ㈱アドバンス大分, 1984 年 11 月 8 日.

7)南條範夫, からみ合い, 光文社, 1959 年 12 月 15 日.

8)南條範夫, からみ合い, 徳間文庫, 1981 年 6 月 15 日.

9)林房雄, 大分 未完成小型文化都市, 日本拝見 西日本篇, 角川書店, pp. 137-139, 1958 年 3 月 20 日.

10)林房雄, 日本拝見 大分 未完成小型文化都市, 週刊朝日 1 月 16 日号, pp. 32-38, 1955 年 1 月 16 日.

11)大宅壮一, 日本のスペイン・大分県, 日本の人物鉱脈, 文芸春秋新社, pp. 86-112, 1959 年 3 月 15 日.

12)梅棹忠夫, 高崎山, 日本探検 pp. 191-205, 中央公論社, 1960 年 11 月 20 日.

13)中央公論社, 中央公論総目次-創刊号より第一〇〇〇号まで, 中央公論社, 1970 年 11 月 20 日.

14)石川栄耀, 名都の表情 條件と分類, 市政 第 3 巻 第 1 号, pp. 22-34, 1954 年 1 月 15 日.

15)石川栄耀, 都市美鑑賞, 余談亭らくがき, 都市美技術家協会, pp. 46-66, 1956 年 10 月 25 日.

16)石川栄耀, 広場抄, 余談亭らくがき, 都市美技術家協会, pp. 30-45, 1956 年 10 月 25 日.

17)石川栄耀, ヨーロッパの都市・日本の都市, 余談亭らくがき, 都市美技術家協会, pp. 67-73, 1956 年 10 月 25 日.

18)中川郁二, ロマンを追って　元大分市長上田保物語, 大分合同新聞社, 2003 年 2 月 15 日.

19)渡辺克己, 作家の見た大分, 大分今昔(再版), 大分合同新聞社, pp. 391-405, 1983 年 8 月 25 日.

20)小野茂樹, 近代文学研究 大分県と文学, 藤井書房, 1967 年 5 月 3 日.

21)加藤迪男編, 366 日の話題事典(再版), 東京堂出版, 1999 年 12 月 10 日.

22)上田正昭, 西澤潤一, 平山郁夫, 三浦朱門, 日本人名辞典(第二版), 講談社, 2001 年 12 月 25 日.